



カタクチイワシ（太平洋系群）①

カタクチイワシは日本周辺に広く生息し、本系群はこのうち太平洋側に分布する群である。

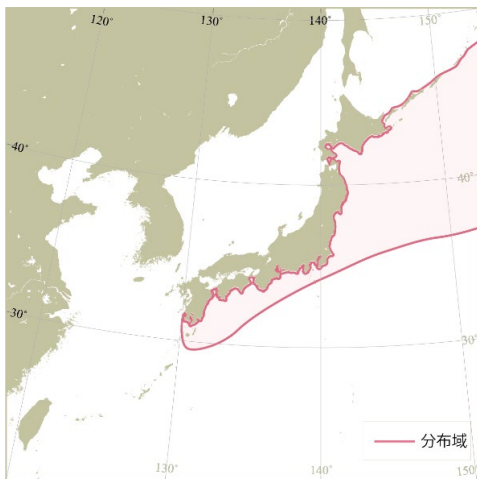


図1 分布域

太平洋の沿岸域から沖合域にかけて広く分布する。産卵も、沿岸～沖合の広い海域で行われる。資源が少ない時代は、沖合域における分布量は少ない。

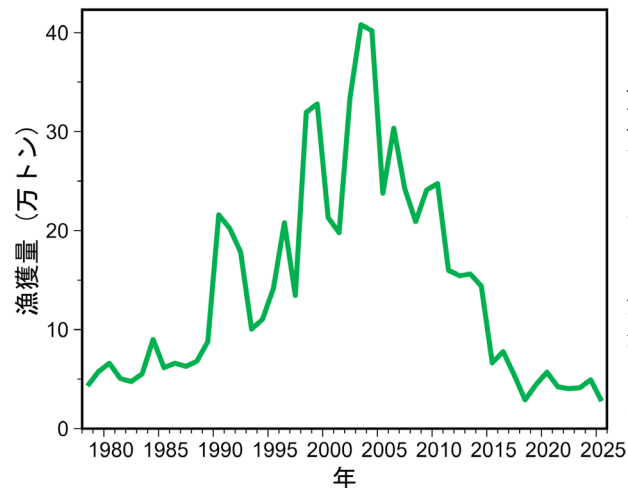


図2 漁獲量の推移

漁獲量は、1990年に急増し20万トンを上回り、2003年には過去最高の40.8万トンとなった。その後は減少傾向を示したが、近年は横ばい傾向にあり、2025年は2.8万トンであった。

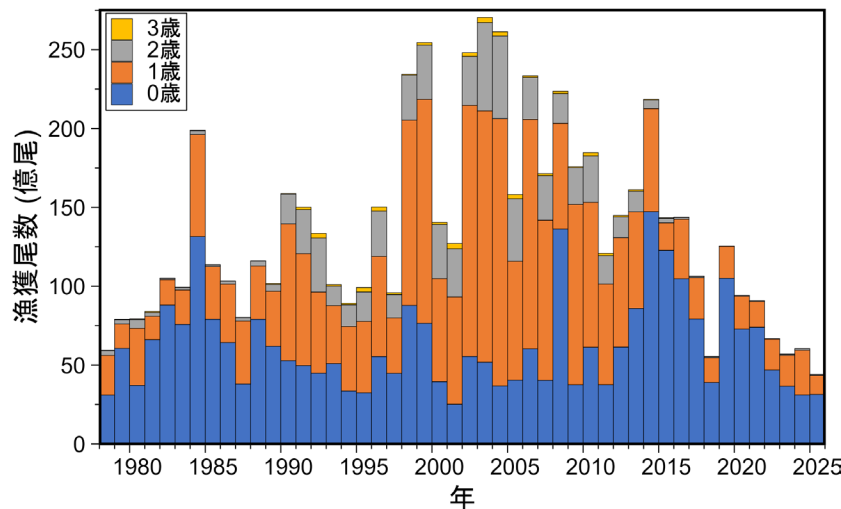


図3 年齢別漁獲尾数の推移

漁獲物の年齢組成を尾数で見ると、1990～2013年には2歳（灰）と3歳（黄）が概ね10%以上含まれていたが、2014年以降は0歳（青）と1歳（橙）が漁獲物の大部分（97%以上）を占めた。

カタクチイワシ（太平洋系群）②

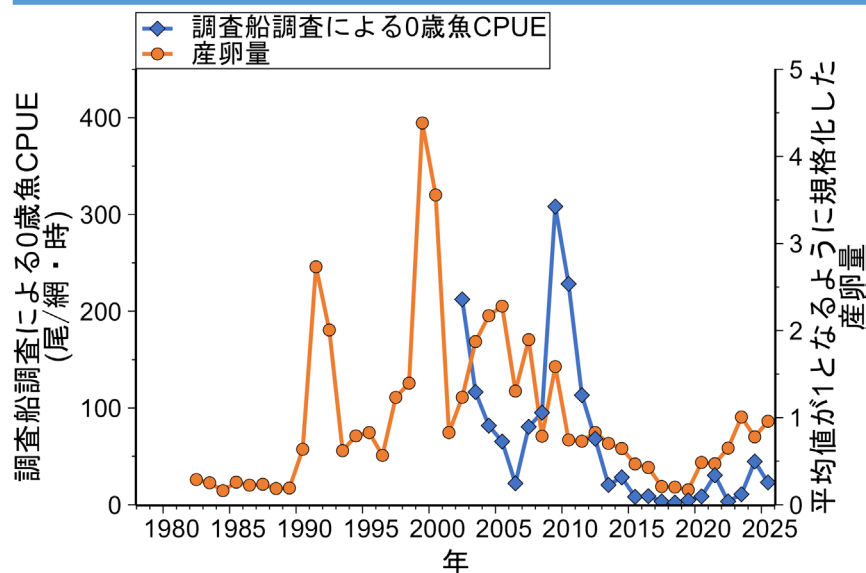


図4 資源量指標値の推移

加入量の指標である調査船調査による0歳魚CPUE（北西太平洋で5～7月に実施している中層トロール調査において1曳網1時間あたりに採集された尾数）は、2015年以降、低い水準で推移しているが、2021年、2024年には比較的高い値を示した。

親魚量の指標である調査船調査による産卵量は、1990年代に増加傾向を示した後、2000年代以降減少傾向を示し、2017～2019年には低い水準で推移したが、2020年以降は増加傾向となり、比較的高い値となっている。

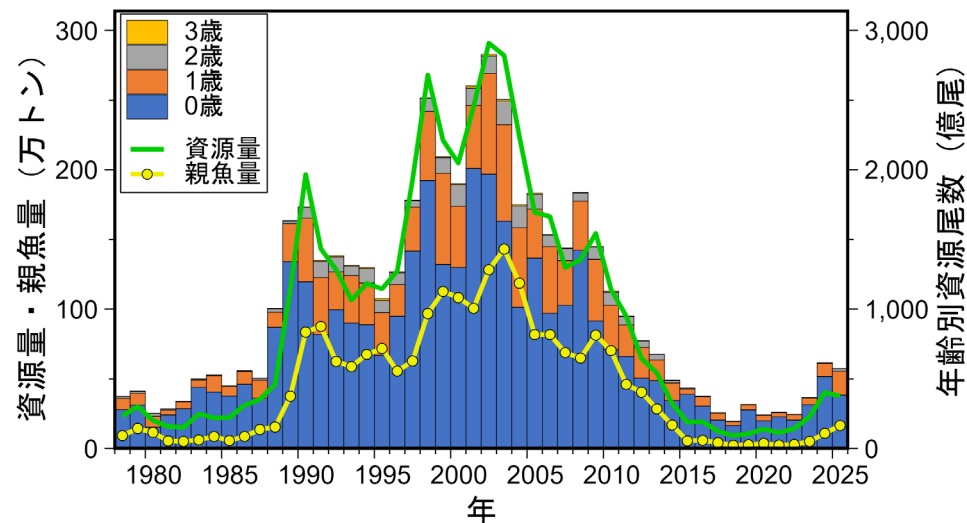


図5 資源量、親魚量および年齢別資源尾数の推移

資源の年齢組成を尾数でみると、0歳（青）と1歳（橙）を中心に構成されている。加入量（0歳の資源尾数）、資源量（緑折れ線）および親魚量（黄折れ線、丸印付き）は2000年代中盤から減少傾向にあったが、2019年以降は増加傾向にあり、2025年の資源量は37.7万トン、親魚量は16.5万トンであった。

カタクチイワシ（太平洋系群）③

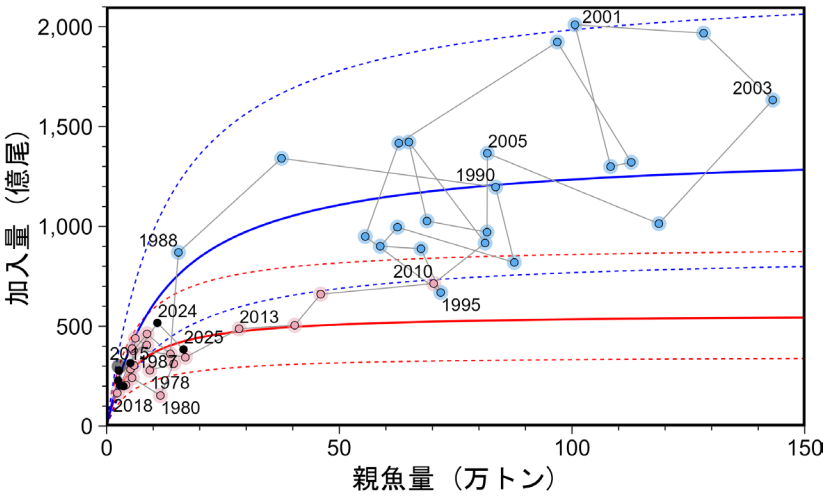


図6 再生産関係

通常加入期と高加入期で分けたベバートン・ホルト型再生産関係を適用した。通常加入期（赤太線）は、1978～1987年および2010～2018年（赤丸）の、高加入期（青太線）は、1988～2009年（青丸）の親魚量と加入量に基づく。図中の点線は、それぞれの再生産関係の下で加入量の90%が含まれると期待される範囲である。灰丸は2020年度評価に基づく2019年の観測値、枠線のみ丸および黒丸は2026年度資源評価で更新された観測値である。

※将来予測は通常加入期の再生産関係に基づく。

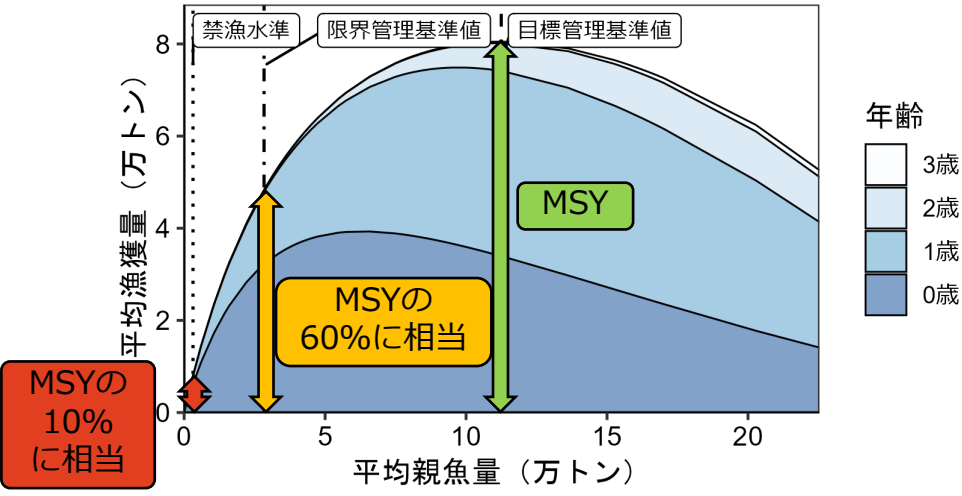


図7 管理基準値

通常加入期における最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は11.2万トンと算定される。当該加入期における目標管理基準値はSBmsy、限界管理基準値はMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準はMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量である。

目標管理基準値	限界管理基準値	禁漁水準	2025年の親魚量	MSY	2025年の漁獲量
11.2万トン	2.8万トン	0.3万トン	16.5万トン	8.1万トン	2.8万トン

カタクチイワシ（太平洋系群）④

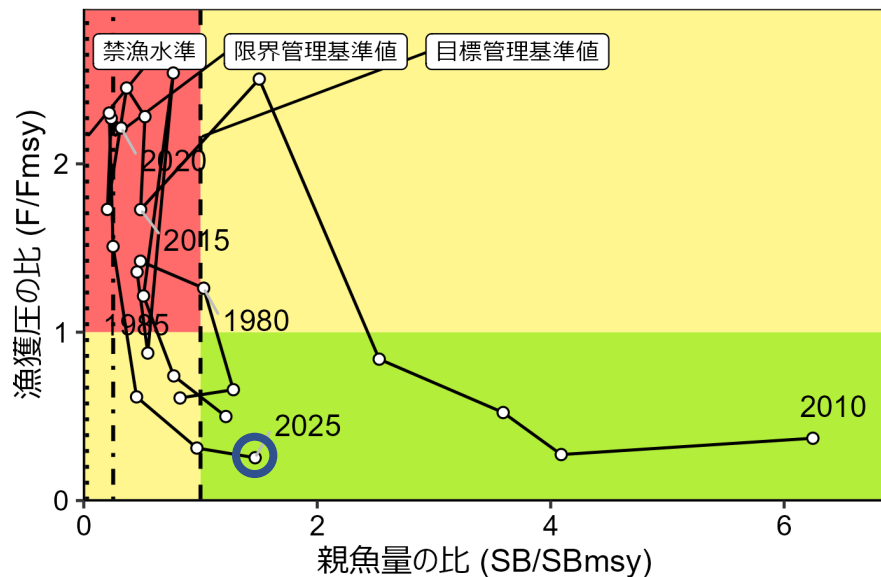


図8 神戸プロット（神戸チャート）

親魚量（SB）は、2010年以降では、2010～2014年に最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）を上回った後、2015～2024年には下回った。2025年の親魚量は、SBmsyの1.47倍であった。

漁獲圧（F）は、2010年以降では、2010～2013年にはSBmsyを維持する漁獲圧（Fmsy）を下回った後、2014～2022年には上回ったが、2023年以降はFmsyを下回っている。2025年の漁獲圧は、Fmsyの0.25倍であった。

※ 通常加入期（1978～1987年および2010～2025年）の結果を記載。

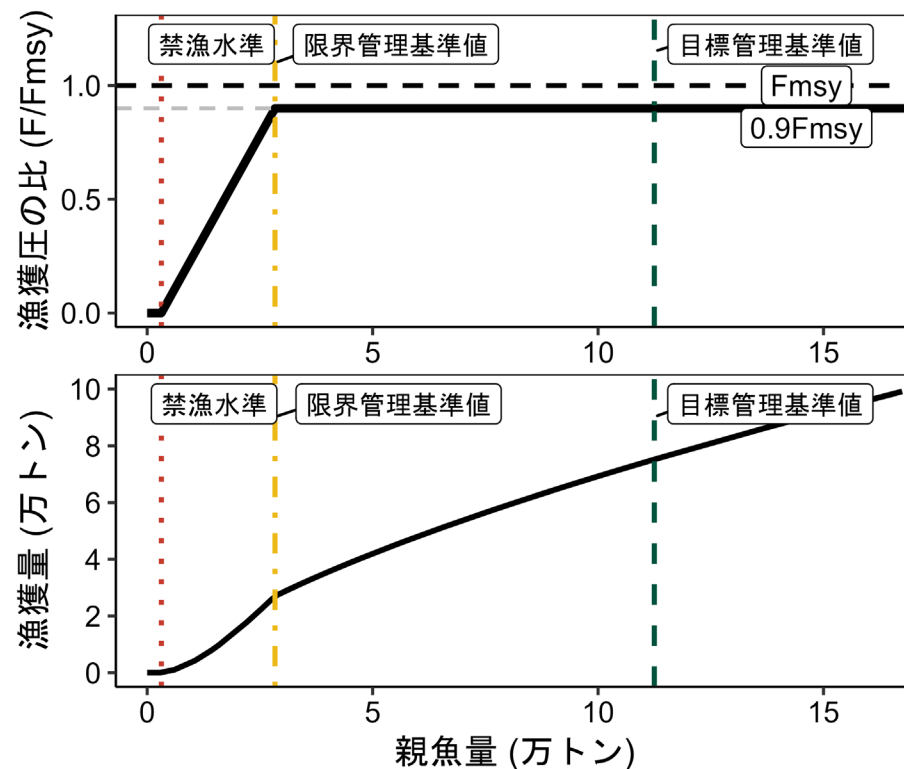


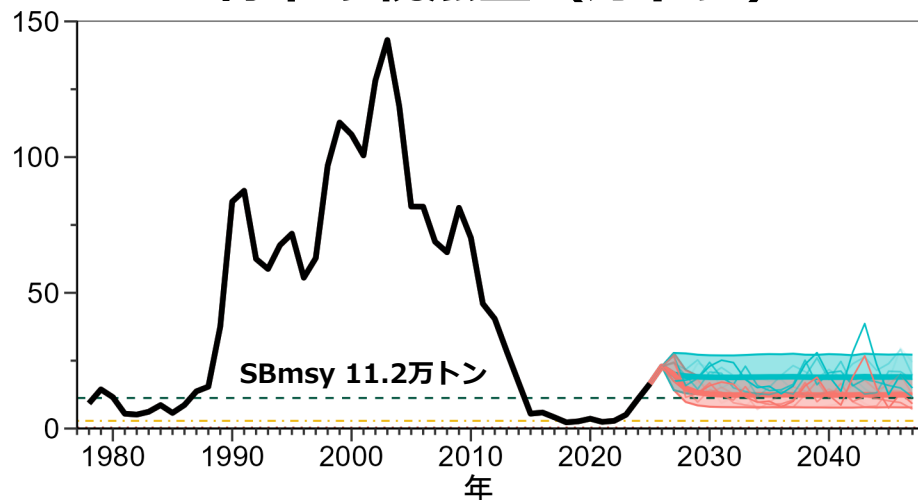
図9 漁獲シナリオ

（上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量）

漁獲シナリオ（調整係数である $\beta=0.9$ ）を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

カタクチイワシ（太平洋系群）⑤

将来の親魚量（万トン）



将来の漁獲量（万トン）

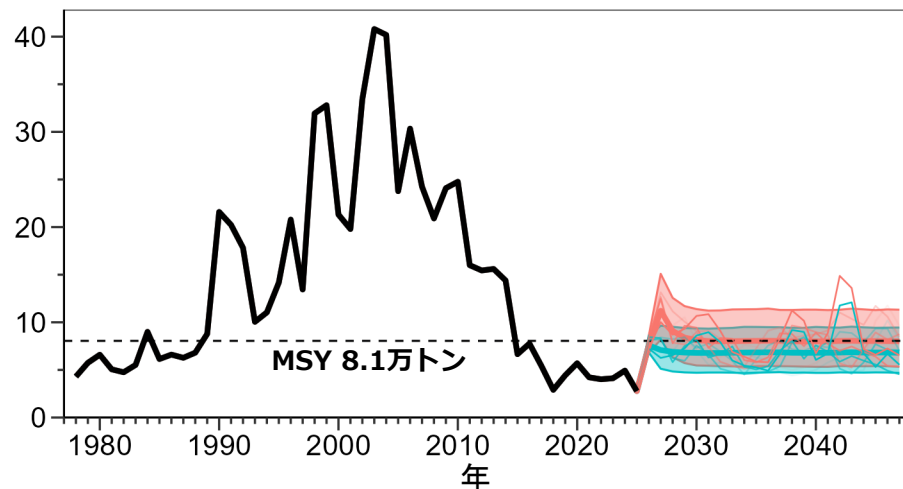


図10 漁獲シナリオの下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

漁獲シナリオ（ $\beta=0.9$ ）に基づく漁獲を継続した場合の将来予測結果を示す。

平均値としては、親魚量はSBmsyよりも高い水準で推移するとともに、漁獲量はMSY付近で推移する。

漁獲シナリオに基づく将来予測
（ $\beta=0.9$ ）

現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1万回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

----- MSY

----- 目標管理基準値

----- 限界管理基準値

..... 禁漁水準

カタクチイワシ（太平洋系群）⑥

表1. 将来の平均親魚量（万トン）					2035年に親魚量が目標管理基準値（11.2万トン）を上回る確率						
β	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	
1.0	22.9	20.0	14.0	12.3	11.6	11.4	11.3	11.3	11.3	11.3	45%
0.9			14.8	13.3	12.7	12.5	12.3	12.4	12.4	12.4	59%
0.8			15.7	14.4	13.8	13.6	13.5	13.6	13.6	13.6	73%
0.7			16.7	15.6	15.1	15.0	14.9	14.9	15.0	15.0	85%
現状の漁獲圧			19.3	19.0	18.9	18.9	18.8	18.9	19.0	19.0	98%

表2. 将来の平均漁獲量（万トン）										
β	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035
1.0	7.6	12.0	9.3	8.5	8.2	8.1	8.0	8.1	8.1	8.1
0.9		11.2	9.1	8.4	8.1	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0
0.8		10.4	8.8	8.2	8.0	7.9	7.9	7.9	7.9	7.9
0.7		9.5	8.3	7.9	7.8	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7
現状の漁獲圧		7.1	6.9	6.8	6.8	6.8	6.8	6.8	6.8	6.8

漁獲シナリオ（ $\beta=0.9$ 、赤枠）に基づき漁獲した場合の平均親魚量と平均漁獲量の将来予測を示す。2026年の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧（2023～2025年の平均： $\beta=0.45$ 相当）により仮定した。

この漁獲シナリオに従うと、2027年の平均漁獲量は11.2万トン、2035年に親魚量が目標管理基準値を上回る確率は59%と予測される。併せて、 β を0.7～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧の場合の将来予測結果も示した。

表3. ABC要約表			
2027年のABC （万トン）	2027年の親魚量 予測平均値（万トン）	現状の漁獲圧に対する比 （F/F2023-2025）	2027年の漁獲割合 （%）
11.2	20.0	2.02	28

注：表の値は今後の資源評価により更新される。